

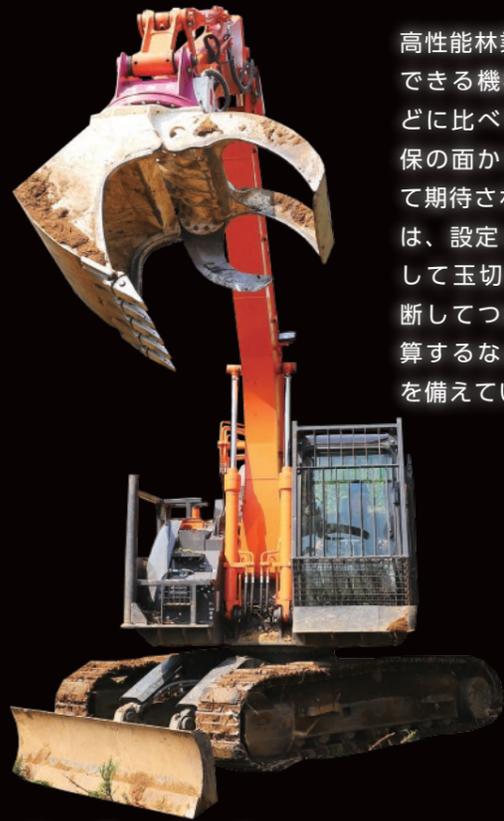


高性能林業機械の動画を解説付きで公開中。
左のQRコードからご覧ください。



高性能林業機械が 仕事を 変える

高性能林業機械とは、「1台で2つ以上の仕事ができる機械」のことです。従来のチェーンソーなどに比べて、省力化や安全性の向上、労働力確保の面から、今後は林業の中心となる機械として期待されています。特に、最新の「ハーベスタ」は、設定した長さに自動で計測して玉切る、木の硬さを判断してつかむ、材積を計算するなど多くの機能を備えています。



フェラーパンチャ

立木を伐倒し、切った木をそのままつかんで集積することができる。チェーンソーに代わって伐倒作業を行う。バケット部分では集材路などの道路整備も可能。



ハーベスタ

従来チェーンソーで行っていた立木の伐倒、枝払い、玉切りの各作業と玉切りした材の集積作業の4工程を1台で行う自走式の高性能林業機械。

株式会社厚ケ瀬
代表 厚ケ瀬 一浩 さん



木を切り倒す「伐倒」作業は、木材生産の中で最も危険をとまなう作業の一つ。これまでの伐倒作業は、チェーンソーを使って一本ずつ人の手で切り倒していました。現在は「高性能林業機械」の性能向上によって、急傾斜地などを除いては、ほとんど機械で伐倒できます。また、「伐り倒す」「枝を払う」「均等に切る（玉切り）」「集材」するなどの作業を1台で、さらに機械から降りることなくできるようになりました。特にハーベスタの導入によって倍以上の効率化が図られるので、安全性の確保や人手不足の解消にも繋がっています。現在は11台の高性能林業機械を導入しており、今後の山づくりには欠かせない存在となっています。

つなぐ鍵は植林

大隅半島は県内でも早くからスギを主体に造林が進められ人工林の約90%が木材として利用できる大きさになっています。

林業は、山を耕し、苗木を植え、ある程度大きくなるまで下刈や枝打ちなどの管理を行い、太陽の光が地面に差し込むように間引く除伐や間伐をしながら木材を生産する仕事です。木材として販売できるまでに、約45年もの長い年月と多くの手間を必要とします。

近年は、高性能林業機械の性能向上や普及によって大量の木を伐採・搬出することができるようになりました。しかし、木は限りある資源。次の世代に繋ぐためには、伐ったあとの「植林」が必要不可欠です。



伐採の時期を迎えたスギなどを伐って収穫する作業です。最近では高性能林業機械を活用して、これまでより、効率よく安全に作業できるようになっています。

木が大きくなると木同士が混み合ってくるので、地面に光が届くように伐採（間引く）する作業です。利用できる大きさの木材は搬出して利用されます。



伐採した森林に苗木を植えるため、枝などを片付け、整地する作業です。「くわ」などで植える穴を掘り、スギなどの苗木を一本ずつ丁寧に植えていきます。

刈払機を使って、植え付けた苗木を切らないように刈り払います。鹿児島などの温暖な気候では、夏場に2回ほど刈払う必要があります。



戦後に植林されたスギやヒノキなどの人工林が、木材として本格的に利用できる時期に入りました。最近では木材需要が増え、地域の木材を安定的に供給しながら、林業や木材産業の発展による地域活性化の取り組みを進めています。平成29年度からは、錦江町を含めた大隅地域で「林業成長産業化地域創出モデル事業」の実施地域に選定された全国16ヶ所（現在28ヶ所）のひとつとして「林業の成長産業化」実現を目指しています。

錦江町担当の指導員として「大隅地域の林業が変わった。活気が出てきた。」と感じてもらえるような取り組みに繋がりたいと思います。



大隅地域振興局 林務水産課
技術専門員 図師 朋弘 さん